

## 創世記41－42章 「ヨセフの夢の実現」

### 1A エジプトの権力者へ 41

#### 1B ファラオの夢の解き明かし 1－36

##### 1C 「七」の夢 1－7

##### 2C ヨセフを思い出す献酌官 8－13

##### 3C 夢を語るファラオ 14－24

##### 4C 解き明かし 25－32

##### 5C 対策の勧め 33－36

#### 2B ヨセフによる管理 37－57

##### 1C ファラオの権威貸与 37－45

##### 2C 初めの豊作 46－52

##### 3C カナンにも届く飢饉 53－57

### 2A 兄たちの拝礼 42

#### 1B 罪の暴かれる旅 1－24

##### 1C エジプトへ下る兄たち 1－5

##### 2C 夢の実現 6－8

##### 3C 末の息子についての試し 9－20

##### 4C 消えない罪悪感 21－24

#### 2B 御手に気づかないヤコブたち 25－38

##### 1C 穀物の銀を恐れる兄たち 25－28

##### 2C ベニヤミンを行かせない父 29－38

## 本文

創世記 41 章を開いてください。私たちは、ヨセフが監獄に入れられたところの話で、前回終わりました。ファラオの献酌官と料理官が同じ監獄に入れられて、ヨセフが世話することになりました。そこで二人とも夢を見て、どちらもその通りになり、三日後に献酌官は元の地位に戻り、料理官が木につるされました。ところが、悲劇的なことが起こります。「40:23 **献酌官長はヨセフのことを思い出さないで、忘れてしまった。**」エジプトに奴隷として売られ、監獄にまで入れられ、そして忘れられたのです。もう、すべてが自分に味方していない、神も仏もない！なんて言って、自暴自棄になって全然おかしくありません。

ところが、それでもヨセフは、神がおられることを信じていたことはこれから話で、証しされます。この前学びましたように、神に遣わされているのであれば、むしろ到底、そこに神がおられないと人間的には考えられるところに、むしろおられるのです。なぜなら、遣わされているのは世であり、

世は闇であり、しかしそこに神が光として世を照らそうとしておられるからです。

## 1A エジプトの権力者へ 41

### 1B ファラオの夢の解き明かし 1-36

#### 1C 「七」の夢 1-7

<sup>1</sup>それから二年後、ファラオは夢を見た。見ると、彼はナイル川のほとりに立っていた。

つまり、献酌官長が元の地位に戻ってから二年後です。その間、ヨセフは忘れられていました。しかし、その失念こそが、神によって用いられていたのです。神は、失念ということさえ、ご自分の目的のために相働させるのです。二年後でなければいけなかったのです。それは、エジプト中に、そしてエジプトの周囲の世界全体に、大飢饉が訪れるからです。その時に、王の心を動かしておられる神は、ファラオに夢をお見せになって、対策を練るように促しておられるからです。そこで、その対策を練る者にふさわしいのが、ヨセフなのです。

夢において、ファラオはナイル川のほとりにいました。これから、出エジプト記に至るまで、エジプトが聖書の舞台になります。神がモーセによって災いを下す時も、ファラオがナイル川のそばに立っていましたね。この川はエジプトの神々の一つであり、ファラオはそこに行って礼拝を献げました。

エジプトは、エジプト文明と呼ばれるように、古代の超大国です。しかし、私たちもエジプトに行って分かりましたが、居住地はごく限られていて、ナイル川流域です。このナイル川こそが、豊かさをもたらしていました。下流、すなわち地中海に近い流域はデルタと呼ばれて、そこに後にヤコブの家族が住むゴシェンもあります。肥沃な地帯です。なぜなら、年に一度、ナイル川が氾濫して、そこに肥沃な土が運ばれてくるからです。ですから、ファラオがナイル川に立っていて、これから見る夢を見るというのは、エジプトの運命のかかっている一大事だということを醸し出しています。

<sup>2</sup>すると、ナイル川から、つやつやした、肉づきの良い雌牛が七頭、上がって来て、葦の中で草をはんだ。

雌牛が出て来ています。これは単に家畜を意味しておらず、雌牛もエジプト神話の神の一つであり、イシスと呼ばれます。エジプトにおける豊かさを象徴している姿です。そして、七頭でありませんが、聖書で七は、神の完全さを示していますが、エジプトなど周囲の国々も七は神聖視されて、運命的なものを象徴していました。ですから、次に出てくる情景が、いかにファラオの心をざわつかせたかは、想像に難くありません。

<sup>3</sup>するとまた、その後を追って、醜く痩せ細った別の雌牛が七頭、ナイル川から上がって来て、その川岸にいた雌牛のそばに立った。<sup>4</sup>そして、醜く痩せ細った雌牛が、つやつやした、よく肥えた七頭

の雌牛を食い尽くしてしまった。そのとき、ファラオは目が覚めた。

豊かなエジプトが、一気に痩せこけてしまうという、ものすごく不気味な意味合いを持つことは、ファラオも感じ取ったことでしょう。食い尽くしてしまってから、目が覚めているところもいやらしいところです。その後はどうなるの？と思わせたことでしょう。

<sup>5</sup> 彼はまた眠り、再び夢を見た。見ると、一本の茎に、よく実った七つの良い穂が出て来た。

こちらは、雌牛より直接的です。より実際に近づいた夢です。ここ「穂」は麦であると考えられますが、これから起こるのは大飢饉による食糧不足です。エジプトは、古代ずっと麦を輸出するほどの、麦の豊かな生産地でもありました。

<sup>6</sup> すると、その後を追って、しなびた、東風に焼けた七つの穂が出て来た。

聖書に「東風」がしばしば出てきますが、これは、その地域ではハムシンと呼ばれる熱風です。北アフリカやアラビア半島で吹いて、そこにある砂漠から、砂塵を巻き上げます。そして、わずか 2 時間で気温が 20 度も上昇させるときがあります。主に 4 月に起こります。ですから、小麦が実らせる 5 月の前にこの熱風が来て、この七つの穂は痩せこけてしまいました。

<sup>7</sup> そして、しなびた穂が、よく実った七つの穂を呑み込んでしまった。そのとき、ファラオは目が覚めた。それは夢だった。

「それは夢だった」と言っていますから、ファラオは目覚めても、よく考えなければそれが夢だったことが分からないほど、生々しいものだったのです。

### 2C ヨセフを思い出す献酌官 8-13

<sup>8</sup> 朝になって、ファラオは心が騒ぎ、人を遣わして、エジプトのすべての呪法師とすべての知恵のある者たちを呼び寄せた。ファラオは彼らに夢のことを話したが、解き明かすことのできる者はいなかった。

彼が夢を見たのは夜でしたから、朝になってすぐに人を遣わしました。ダニエル書にある出来事と非常に似ていますが、ネブカドネツアルが夢を見て、呪法師や賢者たちを集めましたね。それと同じように、エジプトでも王の顧問たちに、呪法師たちを賢者としてそばに付けていました。宗教や呪術に、王が大きく依存していたのです。

けれども、ダニエルの時と同じように、だれも解き明かすことのできる者はいません。今からヨセ

フが証しますが、これは、まことの神ではない、エジプトの神々やエジプトの霊には決して解き明かすことのできないもの、まことの神の啓示だったからです。

私たちの証しというのが、このような塩味のきいたものになります。つまり、人間の世界ではどうしようもないもの、そこに神がご介入されるのです。キリスト者でなければ持っていないものが、多くあります。人々が、自分たちではどうしようもないことは多くあります。そこで、キリストに従っているからこそ、私たちにとっては当たり前のことですが、世の人たちにとっては奇跡に思われることが、数多くあります。そうやって、世において光るのです。

<sup>9</sup> そのとき、献酌官長がファラオに告げた。「私は今日、私の過ちを申し上げなければなりません。

ここでようやく、献酌官長が、すっかり忘れていたことを思い出します。

<sup>10</sup> かつて、ファラオがしもべらに対して怒って、私と料理官長を侍従長の家に拘留されました。<sup>11</sup> 私と彼は、同じ夜に夢を見ました。それぞれ意味のある夢でした。<sup>12</sup> そこには、私たちと一緒に、侍従長のしもべで、ヘブル人の若者がいました。私たちが彼に話しましたところ、彼は私たちの夢を解き明かしてくれました。それぞれの夢に応じて、解き明かしてくれたのです。<sup>13</sup> そして、彼が私たちに解き明かしたとおりになり、ファラオは私を元の地位に戻され、料理官長は木につるされました。」

まさに、ファラオが今、必要としている人です。言い方を変えれば、ヨセフが忠実に、夢を解き明かしていなければ、こんな機会は与えられなかったのです。私たちが短絡的に、「こんな働きは小さすぎて、益になるとは思えない。」ということをやっていたら、どうでしょうか？ 主は、小さなことに忠実な者に、多くのものをお任せになるのです。それを体現しているのがヨセフです。ポティファルに対しても、監獄の長に対しても、そしてこの二人に対しても全く同じように、接していたからこそ、ファラオの前に出ることになります。

### 3C 夢を語るファラオ 14-24

<sup>14</sup> ファラオは人を遣わして、ヨセフを呼び寄せた。人々は急いで彼を地下牢から連れ出した。ヨセフはひげを剃り、着替えをして、ファラオの前に出た。

地下牢にいて、ファラオの前に出るには、あまりにもみすぼらしいです。また、「ひげを剃り」とありますが、ヘブル人は律法によっても、ひげは男のシンボルのように教えられています。けれども、エジプト人は体毛のすべてを剃ります。極端なまでに潔癖を求めています。

<sup>15</sup> ファラオはヨセフに言った。「私は夢を見たが、それを解き明かす者がいない。おまえは夢を聞いて、それを解き明かすと聞いたのだが。」<sup>16</sup> ヨセフはファラオに答えた。「私ではありません。神がフ

アラオの繁栄を知らせてくださるのです。」

ダニエルもそうでした、ヨセフもそうです。はっきりと、「私ではありません。神が」と言っています。ここで、二つの危険があります。それは、ファラオは異教徒であるからという理由で、神と言う言葉を使うのを控えるという、悪い意味での配慮です。仕事しながら、やたらめったら神とかキリストという言葉を使えばよいというものではありません。むしろ、誠実に働くことによって、言葉ではない証しを立てます。しかし、語らなければいけない時には、静かに慎み深く、しかし確信をもって語るのです。「Ⅰ ペテ 3:15-16a むしろ、心の中でキリストを主とし、聖なる方としなさい。あなたがたのうちに希望について説明を求める人には、だれにでも、いつでも弁明できる用意をしていなさい。16a ただし、柔和な心で、恐れつつ、健全な良心をもって弁明しなさい。」

もう一つの危険は、神の器が、神の栄光を自分のものにするということです。これは、神を恐れる人であっても、犯してしまう過ちです。使徒ヨハネが、光り輝く御使いに対してひれ伏そうとして、厳に戒められる場面が、黙示録 19 章に出てきます。ましてや多神教の信者であれば、何でもかんでも神にしますから、人に対して礼拝することは何の問題も感じません。神を恐れ敬っている、コルネリウスがペテロの前にひれ伏しましたが、それをペテロがやめさせましたね。敬うことと、礼拝することが一体化されているのです。栄光を帰すべきところに帰すのです。

<sup>17</sup> それで、ファラオはヨセフに話した。「夢の中で、見ると、私はナイル川の岸に立っていた。<sup>18</sup>すると、ナイル川から、肉づきの良い、つやつやした雌牛が七頭上がって来て、葦の中で草をはんでいた。<sup>19</sup>すると、その後を追って、弱々しい、とても醜く痩せ細った別の雌牛が七頭、上がって来た。私は、このように醜い牛をエジプト全土でまだ見たことがない。

先ほどの説明より、ファラオ自身の感情が込められていますね。

<sup>20</sup> そして、この痩せた醜い雌牛が、先の肥えた七頭の雌牛を食い尽くしてしまった。<sup>21</sup>ところが、彼らを腹に入れても、腹に入ったのが分からないほど、その姿は初めと同じように醜かった。そのとき、私は目が覚めた。

ここは、新しい情報です。「初めと同じように醜かった」のです。これは、つまりヨセフの後の解き明かしによれば、飢饉があまりにもすごくて、その前に大豊作だったのが分からないほどになるということです。

<sup>22</sup> また、夢の中で私は見た。見ると、一本の茎に、よく実った七つの穂が出て来た。<sup>23</sup>すると、その後を追って、貧弱で、しなびた、東風に焼けた七つの穂が出て来た。<sup>24</sup>そして、そのしなびた穂が、あの七つの良い穂を呑み込んでしまった。そこで私は呪法師たちに話したが、だれも私に説明で

きる者はいなかった。」

初めの夢は、ちょっと象徴的ではありますが、先ほど話しましたように、ここではより、実際に近い形で、穂の夢になっています。

#### 4C 解き明かし 25-32

<sup>25</sup> ヨセフはファラオに言った。「ファラオの夢は一つです。神が、なさろうとしていることをファラオにお告げになったのです。

これから、神がなさろうとしていることを、王であるファラオに示されました。箴言には、「21:1 王の心は、【主】の手の中にあって水の流れのよう。主はみこころのままに、その向きを変えられる。」とあります。王や為政者にしか分からない、世界があります。なぜなら、そこに神がしばしば、ご介入されて、そのしようとしていることを水の流れのように変えられるからです。だから、私たちは上に立つ人々のために、祈り、感謝し、執り成しをしないとけません。( I テモ 2:1)

<sup>26</sup> 七頭の立派な雌牛は七年のことで、七つの立派な穂も七年のことです。それは一つの夢なのです。<sup>27</sup> その後から上がって来た七頭の痩せた醜い雌牛は七年のことで、痩せ細り東風に焼けた七つの穂も同様です。それは飢饉の七年です。<sup>28</sup> これは、私がファラオに申し上げたとおり、神が、なさろうとしていることをファラオに示されたのです。

二つの夢を見せているけれども、一つのことなのだと明確にしています。そして、二度見せた理由は、これが単なる人が見る夢ではなく、神が夢を用いて啓示しておられる確かなものであることを、示すためでした。

<sup>29</sup> 今すぐ、エジプト全土に七年間の大豊作が訪れようとしています。<sup>30</sup> その後、七年間の飢饉が起こり、エジプトの地で豊作のことはすべて忘れられます。飢饉が地を荒れ果てさせ、<sup>31</sup> この地の豊作は、後に来る飢饉のため、跡も分からなくなります。その飢饉が非常に激しいからです。<sup>32</sup> 夢が二度ファラオに繰り返されたのは、このことが神によって定められ、神が速やかにこれをなさるからです。

今、言いましたように、二度繰り返されたのは、神によって定められているからです。そして、「神が速やかにこれをなさる」とあります。ファラオがあまりにも生々しく夢を見て、また矢継ぎ早に見ました。それは、速やかになされることを意味していました。それが一度、起こり始めたら、次々と起こるということです。

黙示録の始まりも、「神がすぐに起こるべきことをしもべたちに示すため(1:1)」となっています。



これは、主の定められた時が来れば、遅らせることなく速やかに、確実に事を行うということです。国が行うことなど、やると言っても、いつまで経ってもそうならないということって、よくありますね。けれども主は違います。やると言われたら、ことごとく計画通りに事を行われるのです。

#### 5C 対策の勧め 33-36

<sup>33</sup> ですから、今、ファラオは、さどくて知恵のある人を見つけ、その者をエジプトの地の上に置かれますように。

この危機における特命大臣を置いてください、ということです。

<sup>34</sup> ファラオは、国中に監督官を任命するよう、行動を起こされますように。豊作の七年間に、エジプトの地の収穫の五分之一を徴収なさるためです。<sup>35</sup> 彼らに、これからの豊作の年のあらゆる食糧をすべて集めさせ、ファラオの権威のもとに、町々に穀物を蓄えさせるのです。彼らは保管し、<sup>36</sup> その食糧は、エジプトの地に起こる七年の飢饉のために、国の蓄えとなります。そうすれば、この地は飢饉で滅びることがないでしょう。」

初めの七年間だけの徴税です。五分之一、20%の負担です。そしてこれが、次の七年、飢饉の時の国庫となります。こうやって、飢饉に備えることができるということです。つまり、ヨセフは、ただ夢を解き明かすだけでなく、どうすればよいのか、その予算配分や行政までも助言をしています。

ロマ 12 章に、教会に与えられるいろいろな賜物が列挙されていますが、その一つが「治める賜物」です。ヨセフも、治める賜物が与えられています。そしてそれは、本質的に、神のかたちとして造られた人間に与えられたものです。人を神が造られたら、支配せよという祝福命令を出しました。

#### 2B ヨセフによる管理 37-57

##### 1C ファラオの権威貸与 37-45

<sup>37</sup> このことは、ファラオとすべての家臣たちの心になかった。

使徒の働き 15 章でも、ヤコブが、異邦人と律法との関係で、その立場を話した時に、みなが納得していました。御霊の賜物の一つに、知恵のことばというのが第一コリント 12 章にあります。いろいろな状況におかれている、いろいろな立場の人々の心になう言葉のことを言います。そこに生まれるのは、平和と正義の実です。

<sup>38</sup> そこで、ファラオは家臣たちに言った。「神の霊が宿っているこのような人が、ほかに見つかるだろうか。」

ここです、異教徒のファラオが、ヨセフの中に神の霊が宿っていると認めているのです。もっとも、彼の言っているのは、神々の霊であります。ネブカドネツアルは、自分が燃える火の炉に投げ入れた三人の、ダニエルの友人が、炉の中で歩いているのを見て、第四の者が「神々の子のようだ」と言っていました。それと同じです。しかし、彼らの神の理解が不十分でも、それでも神を知ることができているのです。これぞ、証しです。イエスが言われた、「聖霊があなたがたの上に臨まれる。そして、わたしの証人となる。」と言われたとおりです。

<sup>39</sup> ファラオはヨセフに言った。「神がこれらすべてのことをおまえに知らされたからには、おまえのように、さとくて知恵のある者は、ほかにはいない。

先ほど、ヨセフが助言した、「さとくて知恵のある人を見つけ、その者をエジプトの地の上に置かれますように」というのは、ヨセフ自身しかいない、ということです。

<sup>40</sup> おまえが私の家を治めるがよい。私の民はみな、おまえの命令に従うであろう。私がまさっているのは王位だけだ。」

エジプトに売られた奴隷から、一気にファラオの次に並ぶ権力者に引き上げられました。この引き上げは、どこかで見覚えがないでしょうか？そうです、私たちの主イエスご自身です。「ピリ 2:8-9 自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。9 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました。」キリストの御霊が、ヨセフに働いておられました。苦しみを経て、卑しめを経て、それゆえ、神がこの方を引き上げられました。あらゆる名、あらゆる力、あらゆる位が、この方の前にひざまずき、イエスが主であると告白します。

<sup>41</sup> ファラオはさらにヨセフに言った。「さあ、私はおまえにエジプト全土を支配させよう。」<sup>42</sup> そこで、ファラオは自分の指輪を指から外してヨセフの指にはめ、亜麻布の衣服を着せ、その首に金の首飾りを掛けた。<sup>43</sup>そして、自分の第二の車に彼を乗せた。人々は彼の前で「ひざまずけ」と叫んだ。こうしてファラオは彼にエジプト全土を支配させた。

自分の指輪、亜麻布の衣服、そして金の首飾りですが、これらがすべて王権を示しています。そして、自分の第二の車に乗せています。すべての者にひざまずけと言わせています。そして、エジプト全土を支配させているのです。これは、まさしく主イエスが、天の神の右の座に、御子として着き、諸国の民の中で、主としてあがめられる姿そのものを示しています。

<sup>44</sup> ファラオはヨセフに言った。「私はファラオだ。しかし、おまえの許しなくしては、エジプトの国中で、だれも何もすることができない。」



この言い回し、ヨセフがエジプトに来てから、ずっと言われていますね。ポティファルについて、「39:6 主人はヨセフの手に全財産を任せ、自分が食べる食物のこと以外は、何も気を使わなかった。」監獄の長についても、「39:23 監獄の長は、ヨセフの手に委ねたことには何も干渉しなかった。」すべてを任せています。ヨセフが忠実なので、どんな時にも同じ真実を主が示されています。

<sup>45</sup> ファラオはヨセフにツァフェナテ・パネアハという名を与え、オンの祭司ポティ・フェラの娘アセナテを彼の妻として与えた。こうしてヨセフはエジプトの地を監督するようになった。

このエジプト名は、「神が語り、生きている」という意味です。そして、エジプトの祭司の娘が、嫁に与えられました。祭司は、宗教的権力としては絶大で、ファラオの管轄からも離れています。ですから、ヨセフが神の名を呼び求めている上に、宗教的に力のある家系の婿になりました。こうやって、権力が与えられて、エジプトの地の穀物を管理するようになります。

## 2C 初めの豊作 46-52

<sup>46</sup> エジプトの王ファラオに仕えるようになったとき、ヨセフは三十歳であった。ヨセフはファラオのもとから出発して、エジプト全土を巡った。

ヨセフは十七歳の時に、兄たちに売られてきました。実に十三年、経っています。そして三十歳というのは、イエス・キリストの公生涯が始まった時のイエスの年齢です。ここにも、主の御霊が働いていることが分かります。

<sup>47</sup> さて、豊作の七年間に、地は豊かに実らせた。<sup>48</sup> ヨセフはエジプトの地で穫れた七年間の食糧をことごとく集め、その食糧を町々に蓄えた。町の周囲にある畑の食糧を、それぞれの町の中に蓄えたのである。<sup>49</sup> ヨセフは穀物を、海の砂のように非常に多く蓄え、量りきれなくなったので、ついに量るのをやめた。

穀物の保管庫を、よく考えて、それぞれの町に置きました。飢饉のときが来たら、そのまま放出することができます。そして、その大豊作が量り切れなくなるほどですから、相当なものです。

<sup>50</sup> 飢饉の年が来る前に、ヨセフに二人の子が生まれた。オンの祭司ポティ・フェラの娘アセナテが産んだ子である。<sup>51</sup> ヨセフは長子をマナセと名づけた。「神が、私のすべての労苦と、私の父の家のすべてのことを忘れさせてくださった」からである。<sup>52</sup> また、二番目の子をエフライムと名づけた。「神が、私の苦しみので、私を実り多い者としてくださった」からである。

ここで、マナセとエフライムが生まれています。後に、ヤコブが二人を直接祝福して、二部族になります。北のイスラエルの代表的部族がエフライムであり、また、38 章で、嫁のタマルと通じて、そ

の後に悔い改めたユダが、南の代表的な部族となります。

午前礼拝でお話ししましたように、マナセが生まれることで、ヨセフはこれまでの苦しみと痛みが和らぎました。忘れることができるということで、彼にマナセと言う名を付けています。次に生まれた子によって、この苦しみの中にあっても実り多いものとなったとして、エフライムという名を付けています。主もまた、私たちに苦しみに対する慰めを下します。

そして将来、苦しみを経て栄光に入ったキリストと同じように、キリストにつく私たちもまた、共に苦しみ、やがて栄光の中に入ります。「ロマ 8:17 子どもであるなら、相続人でもあります。私たちはキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているのですから、神の相続人であり、キリストとともに共同相続人なのです。」

### 3C カナンにも届く飢饉 53-57

<sup>53</sup> エジプトの地での豊作の七年が終わると、<sup>54</sup> ヨセフが言ったとおり、七年の飢饉が始まった。その飢饉はすべての国々に臨んだが、エジプト全土には食物があった。<sup>55</sup> やがて、エジプト全土が飢えたと、その民はファラオに食物を求めて叫んだ。ファラオは全エジプトに言った。「ヨセフのもとに行き、ヨセフの言うとおりにせよ。」<sup>56</sup> 飢饉は地の全面に及んだ。ヨセフはすべての穀物倉を開けて、エジプト人に売った。その飢饉はエジプトの地でもひどくなった。

まるで、大洪水の時に箱舟によってノアの家族が救われたように、エジプトがヨセフに与えられた知恵によって、大飢饉からかろうじて救われていく姿を見ます。

<sup>57</sup> 全地は、穀物を買うためにエジプトのヨセフのところに来た。その飢饉が全地で厳しかったからである。

ここが、次の章とのつながりです。大飢饉の時、カナンの地も含めて、全土に飢饉が広がっていました。それで、ヤコブの家とエジプトがつながっていくきっかけとなります。

## 2A 兄たちの拝礼 42

### 1B 罪の暴かれる旅 1-24

#### 1C エジプトへ下る兄たち 1-5

<sup>1</sup> ヤコブはエジプトに穀物があることを知って、息子たちに言った。「おまえたちは、なぜ互いに顔を見合わせているのか。」<sup>2</sup> さらに言った。「今、私はエジプトに穀物があると聞いた。おまえたちは下って行って、そこから私たちのために穀物を買って来なさい。そうすれば、私たちは生き延び、死なずにすむだろう。」

ヤコブが、エジプトに穀物があることを聞いて、息子たちに行くように言いつけます。しかし、息子たちは、互いに顔を見合わせていますね。これは、彼らが弟ヨセフに対して行ったことを、まだ忘れていないからです。忘れていないどころか、その罪の重さに苛まれているからです。奴隷として売ったということは、当時は、何をされても構わないという意味であり、自分の手を汚さずに殺すにも等しい罪悪でした。それを兄弟に対して行ったのです。

すでに、20 年は経っています。彼が 17 歳の時に売り渡し、ヨセフが 30 歳の時にエジプトを治め始めており、7 年経ってから飢饉が来ています。ヨセフが少なくとも 37 歳になっています。それでも、エジプトに下るということを聞いて、互いに顔を見合わせているのです。時間が忘れさせる、ということは、ないのです。罪意識というのは、告白して、神に赦され、その罪を捨てない限り、消えることはないのです。

<sup>3</sup> そこで、ヨセフの十人の兄弟は、穀物を買うためにエジプトに下って行った。<sup>4</sup> しかし、ヤコブはヨセフの弟ベニヤミンを兄弟たちと一緒に送らなかった。わざわざ彼に降りかかるといけないと思ったからである。

ここは、ヤコブが、まだ立ち直れていないことを示しています。ヨセフは愛するラケルの息子です。同じくベニヤミンはラケルが産んだ子であり、その出産によってラケルは死にました。ベニヤミンに、災いが降りかかってほしくないと思いました。

ヨセフが死んだと思われた時のヤコブの行動を思い出しましょう。「37:34-35 ヤコブは自分の衣を引き裂き、粗布を腰にまとい、何日も、その子のために嘆き悲しんだ。35 彼の息子、娘たちがみな来て父を慰めたが、彼は慰められるのを拒んで言った。「私は嘆き悲しみながら、わが子のところに、よみに下って行きたい。」こうして父はヨセフのために泣いた。」この悲しみから立ち直れず、前に進めていないのです。

<sup>5</sup> こうしてイスラエルの息子たちは、人々に混じって、穀物を買いにやって来た。カナンのに飢饉が起こったからである。

ヤコブの息子と言わず、「イスラエルの息子たち」と変えられていることに注目してください。人間としてのヤコブではなく、神から見た姿です。つまり、これは、かつて弟がエジプトに連れていかれた時と同じようにして、自分たちが今、人々に混じって、エジプトに向かっているということを、暗に言い表しているのです。彼らにとって、自分の罪がこうやって暴かれていると感じたのでしょう。

## 2C 夢の実現 6-8

<sup>6</sup> ときに、ヨセフはこの地の権力者であり、この地のすべての人に穀物売る者であった。ヨセフの

兄弟たちはやって来て、顔を地に付けて彼を伏し拝んだ。

ヨセフが 17 歳の時に見た夢の通りになっています。「37:7 見ると、私たちは畑で束を作っていました。すると突然、私の束が起き上がり、まっすぐに立ちました。そしてなんと、兄さんたちの束が周りに来て、私の束を伏し拝んだのです。」

ここにも、キリストの御霊が働いています。キリストは、同じ兄弟、ユダヤ人たちに見捨てられましたが、再び来られる時、彼らはこの方の前で伏し拝みます。ゼカリヤ書 12 章には、エルサレムに主が戻ってこられ、哀願の霊が注がれて、彼らが初子を失ったかのように嘆き悲しむと書いてあります。それは、自分たちが突き刺した者が、実は自分たちが願い求めていたメシアご自身であることを知るからです。

<sup>7</sup> ヨセフは兄弟たちを見て、それと分かったが、彼らに対して見知らぬ者のようにふるまい、荒々しいことばで彼らに言った。「おまえたちはどこから来たのか。」すると彼らは答えた。「カナンの地から食糧を買いに参りました。」<sup>8</sup> ヨセフには兄弟たちだと分かったが、彼らにはヨセフだとは分らなかった。

ヨセフは、この時にエジプト人の格好をしていますし、通訳を介して話しています。それで、彼らはヨセフだと気づけなかったのです。けれども、ヨセフはすべて分かります。

### 3C 末の息子についての試し 9-20

<sup>9</sup> かつて彼らについて見た夢を思い出して、ヨセフは言った。「おまえたちは回し者だ。この国の隙をうかがいいに来たのだろう。」<sup>10</sup> 彼らは言った。「いいえ、ご主人様。しもべどもは食糧を買いに参りました。」<sup>11</sup> 私たちはみな、一人の人の子です。私たちは正直者です。しもべどもは回し者などではございません。」<sup>12</sup> ヨセフは彼らに言った。「いや、おまえたちは、この国の隙をうかがいいにやって来たのだ。」

ヨセフは、自分の見た夢のとおりになっているのを知りました。けれども、その夢を話したから、兄たちが自分を憎んで、それで奴隷として売ったのを思い出したのでしょうか。

ここからは、一つのことを知りたかったのです。回し者だと彼が荒々しく言っているのは、あくまでも試しているのです。それは、兄たちが弟ベニヤミンに対しても同じことをしているのか？ということ。彼らが、心を入れ替えているのかどうか、知りたかったのです。

<sup>13</sup> 彼らは言った。「しもべどもは十二人兄弟で、カナンの地にいる一人の人の子でございます。末の弟は今、父と一緒にいますが、もう一人はいなくなりました。」<sup>14</sup> ヨセフは彼らに言った。「私が、

おまえたちは回し者だと言ったのは、そのことだ。

これで、ベニヤミンのことを聞き出すことができました。それで、彼が確かに生きているのを、この目で見たいと思ったのです。

<sup>15</sup> 次のことで、おまえたちを試そう。ファラオのいのちにかけて言うが、おまえたちの末の弟がここに来ないかぎり、おまえたちは決してここから出ることはできない。<sup>16</sup> おまえたちのうちの一人を送って、弟を連れて来い。それまで、おまえたちを監禁する。おまえたちに誠実さがあるかどうか、おまえたちの言ったことを試すためだ。もし誠実でなかったら、ファラオのいのちにかけて言うが、おまえたちは間違いなく回し者だ。」<sup>17</sup> こうしてヨセフは三日間、彼らを監獄に入れておいた。

ヨセフが「回し者だ」と言っているのは、もちろん、エジプト人の役人のふりをしているだけです。ヨセフの時代に、エジプトにはカナン方面から侵入者がしばしばいたことがありました。けれども、他のことについては、「おまえたちに誠実さがあるかどうか、おまえたちの言ったことを試すためだ」ということです。ヨセフはエジプトのお奉行様のふりをしながら、かなり素性を明かしています。

<sup>18</sup> ヨセフは三日目に彼らに言った。「次のようにして、生き延びよ。私も神を恐れる者だから。<sup>19</sup> もし、おまえたちが正直者なら、おまえたちの兄弟の一人を監獄に監禁したままにせよ。自分たちは飢えている家族に穀物を持って行くがよい。<sup>20</sup> そして、末の弟を私のところに連れて来るがよい。そうすれば、おまえたちのことばが本当だということが分かり、おまえたちが死ぬことはない。」そこで彼らはそのようにした。

ヨセフの本音が、次々と出ています。全員を三日間、監禁していたのですが、「私も神を恐れる者だから。」と言っています。ちょっとやり過ぎだと思ったのでしょうか。食糧を一人で持ち帰るのは、限界があり、父の家の安寧を気にしたのかもしれませんが。けれども、だれかを監禁していなければ、彼らが戻って来る動機が大きくなるとみなして、それで一人だけ監禁することに決めました。

#### 4C 消えない罪悪感 21-24

<sup>21</sup> 彼らは互いに言った。「まったく、われわれは弟のことで罰を受けているのだ。あれが、あわれみを求めたとき、その心の苦しみを見ながら、聞き入れなかった。それで、われわれはこんな苦しみにあっているのだ。」

ここです、兄たちは罪悪感に苛まれていました。こんなことが起こっているのは、自分たちが弟に無慈悲なことをしたからだ、その罰が来ているのだということです。罪というのは、告白しなければ残ります。罪は告白して捨てる時に、神が豊かに赦してくださいます。「箴 28:13 自分の背きを隠す者は成功しない。告白して捨てる者はあわれみを受ける。」

<sup>22</sup> ルベンが言った。「私はあの子に罪を犯すなど言ったではないか。それなのに、おまえたちは聞き入れなかった。だから今、彼の血の報いを受けているのだ。」

そうです、ルベンは弟に手を出すなど言っていました。そして奴隷として売りましたが、先ほども言いましたように、それは自分たちの手を汚さないで、殺してもらおうというぐらいの行為でした。なので、「彼の血の報いを受けている」と言っています。

<sup>23</sup> 彼らは、ヨセフが聞いていることを知らなかった。ヨセフと兄弟たちの間には通訳がいたからである。<sup>24</sup> ヨセフは彼らから離れて、泣いた。それから彼らのところに戻って来て、彼らに語った。そして彼らの中からシメオンを捕らえて、彼らの目の前で彼を縛った。

ヨセフが泣きました。そして、シメオンを捕えています。長男のルベンが止めようとしたことが、はっきりしました。その次の兄がシメオンです。それからレビ、ユダと続きます。シメオンが、ヨセフを殺そうとしたことに強く働きかけたことが分かったのでしょうか。シメオンまたレビは、妹ディナがシェケムで凌辱されて、その住民を虐殺しました。そういった制御できない怒りの問題があるようです。

## 2B 御手に気づかないヤコブたち 25－38

### 1C 穀物の銀を恐れる兄たち 25－28

<sup>25</sup> ヨセフは彼らの袋に穀物を満たし、それぞれの袋に彼らの銀を戻し、さらに道中の食糧を与えるように命じた。それで、人々はそのとおりにした。

これは、ヨセフが全く、彼らから金をとらないことの印です。ヨセフは、この時からすでにヤコブの家を養うことを考えていたことでしょう。

<sup>26</sup> 彼らは穀物を自分たちのろばに背負わせて、そこを去った。<sup>27</sup> さて、彼らの一人が、宿泊所で自分のろばに飼料をやるうとして袋を開けると、自分の銀が、見よ、自分の袋の口にあった。<sup>28</sup> 彼は兄弟たちに言った。「私の銀が戻されている。しかもこのとおり、私の袋の中に。」彼らは動転し、身を震わせて、互いに言った。「神は私たちにいったい何をなさったのだろう。」

自分たちの支払った銀が入っていたことは、確かに気味が悪いです。けれども、何かにつけ、神からの不気味なお告げであるかのように、恐れに支配されています。彼らは、相当、罪とその恐れに満たされています。「Iヨハ 4:18 愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。恐れには罰が伴い、恐れる者は、愛において全きものとなっていないのです。」

## 2C ベニヤミンを行かせない父 29－38

<sup>29</sup> 彼らはカナンの地にいる父ヤコブのもとに帰って、その身に起こったことをすべて彼に告げた。



<sup>30</sup>「あの国の主君である人が私たちに厳しく語り、私たちを、あの国を探る回し者のように扱いました。<sup>31</sup> 私たちはその人に、『私たちは正直者で、回し者などではありません。<sup>32</sup> 私たちは十二人兄弟で、同じ父の子です。一人はいなくなりましたが、末の弟は今、カナンの地に父と一緒にいます』と申しました。<sup>33</sup> すると、その国の主君である人が私たちに言いました。『こうすれば、おまえたちが正直者かどうか分かる。おまえたちの兄弟を一人、私のところに残して、飢えているおまえたちの家族に穀物を持って行け。<sup>34</sup> そして、末の弟を私のところに連れて来い。そうすれば、おまえたちが敵の回し者ではなく、正直者だということが分かる。そこで私はおまえたちの兄弟を渡そう。そうして、おまえたちはこの地に出入りができるようになる』と。」

そのまま起こったことを父に告げていますね。

<sup>35</sup> それから彼らが自分たちの袋を空けると、見よ、一人ひとりの銀の包みが自分の袋の中にあった。彼らも父も、この銀の包みを見て恐れた。

一人だけでありませんでした。すべての者の銀が袋にありました。そして、ここで父も恐れています。それで次の言葉です。

<sup>36</sup> 父ヤコブは言った。「おまえたちは、すでに私に子を失わせた。ヨセフはいなくなり、シメオンもいなくなった。そして今、ベニヤミンまで取ろうとしている。こんなことがみな、私に降りかかってきたのだ。」

ヤコブが、たった今、見ていることですべてを判断してしまっている言葉です。子を失わせた、というのは事実ですね。しかし、それからヨセフがいなくなったと言えますか？そして、シメオンは死んでいません、エジプトで監禁されているだけです。そして、今、ベニヤミンを取ろうとしていると言っていますが、別に取りられるわけではありません。

そして、最も言うてはいけない言葉は、「こんなことがみな、私に降りかかってきたのだ」であります。英語ですと、"All these things are against me."すべてが、私に敵対している、と言っているのです。神が味方しているのであれば、だれが敵対できるでしょうと、パウロはロマ書 8 章で言っていますが、真逆のことを言っています。主のご計画の一部しか見ていないのに、そのごく一部で、神のご計画の全体を語ってしまっている過ちです。

<sup>37</sup> ルベンが父に言った。「もし私がこの弟をあなたのもとに連れ帰らなかったら、私の二人の子を殺してもかまいません。彼を私に任せてください。この私が彼をあなたのもとに連れ戻します。」

ルベンは長子として責任を果たしたいと思っていますが、だれが責任を取るのに、孫が二人死

ぬのを喜びますか？彼は、水のように奔放であると、ヤコブに後に預言されます。リーダーシップが取れないのです。

<sup>38</sup> するとヤコブは言った。「この子は、おまえたちと一緒にには行かせない。この子の兄は死んで、この子だけが残っているのだから。道中で、もし彼にわざわいが降りかかれば、おまえたちは、この白髪頭の私を、悲しみながらよみに下らせることになるのだ。」

これが、ヤコブです。しかし、次の章で、イスラエルに再び名前が戻るところがあります。それは、彼がベニヤミンを主にあって手放す時です。

ヤコブの家は、このようにして兄たちが罪意識に苛まれて、父は悲しみの中に沈み込み、まだ信仰の中に立つことができていません。しかし、後知恵を持っている私たちは、神がすべてのことを相働かせて、益としておられることを知っています。しかし、神を愛して、神に召されている人々には、この真理を後知恵でなくとも、知ることができているのです。とんでもないことが起こっていて、それでももちろん感情は、すべてのわざいわいが自分にふりかかったと感ずることになるでしょう。けれども、その感情を突っ切って、確信が与えられます。神がすべてを相働かせて、益にしておられると、感情を越えて、知ることができているのです。